

饗宴（シンポジオン）に政治の話はふさわしくない

政治哲学・理論、平和研究を専門とするゼミで、院生7名、学部生33名が在籍中。
抽象的議論に終始してしまわないよう、沖縄合宿では戦争の傷跡や基地問題を肌で感じます。

萩原能久
はぎわらよしひさ
法学部政治学科 教授

毎週、時間割の制約にこだわらず数時間かけて行われるゼミでの討論は、院生も含めた学生たちにも私も加えて、古今東西の賢人を、場合によっては黄泉の国からお招きして行われる：これが私たち萩原ゼミのスタイルです。

もちろん比喩ですよ。決して怪しい交霊会を開催するオカルト研究会なのではありません。言いたいことはつまり、ゼミでの議論にあつては教師である私ももちろん、歴史に名を残すような知的巨人でさえ、自著のテキスト解釈において特権的な地位を占めることは許されていないということです。ゼミでの討論の目標はつねに、それぞれ異なる価値観や視点を有する討論参加者たちのあいだでの「地平の融合」なのであり、討論のネタを提供してくれている大哲学者もそこではいち参加者でしかないのです。

別の言い方をするならば、私たちの求めているのはなんらかのテキストの「正しい解釈」（そのような

ものがはたして存在するのでしょうか）ではなく、あえて言えば創造的曲解の方なのです。そのためにはホップズよりもホップズ的になる必要があるでしょうし、場合によってはアレントのテキストを、アレントに逆らつて読むことすら求められます。

だから私たちのゼミで「分かりました」は禁句です。分かっちゃいましたら、問いはそこで終わっちゃいます。理解しようと努力しつつ、それでもまだそこに理解されないまま残る続けるものを、つまり自分たちが分かっちゃいないことを分かってと私たちは苦闘しているのです。

そのような討議空間を作り出していくゼミの場で、案内役でもある私が心がけているのは「学ぶ」ということの楽しさを学生たちに伝えることです。いったんその楽しさを覚え、自学自習のスイッチが入ったら、教師の出る幕はもう終わりです。その意味で仕事をいかに減量するか、つまり学生たちを手早く自律させ、自分が楽をできるよう工夫するのが私の仕事です。

責任ある言論者へ

しぶたにあきえ
渋谷昭絵 法学部政治学科4年

「政治とは公的な空間で意見を表明することである」との先生のお言葉が印象に残っています。しかし、公的な空間で意見を表明することは想像以上に勇気のいることです。というのも「意見」は絶対的に正しいものではありません、自分がこれまで見聞きした経験に限定された不完全なものでしかないからです。それでもそのような正しさの確証のない「意見」を私たちは語り続けなければならない、また、公的な「語り」は（それが公的であるがゆえに）、良くも悪くも現実を変え得る力を有しているのです。そのような公的な空間の中で、あらゆる批判を受けつつも責任ある言論者であろうとする姿勢こそ、私が研究会で学んだことなのです。



考えろ、とにかく考えろ

先生の専門……本当のところよく分かりません（笑）。
たぶん、世の中で生きていくために必要な事全部を学んでいます。現在、学生数は25名です。

権丈先生に師事したい！ という熱い想い

さかい えり
酒井絵理 法学部法律学科3年

ゼミ選別に悩んでいた私は、ある日商学部のWebサイトで、書かれていることが頭の中にス〜ッと入ってくる面白い先生を発見！
そういう私は、法学部法律学科の学生。本を手に見ると、難しいはずの財政や社会保障の話が「要するにこういうことだろう」と軽快なテンポで……。一気に読み終え、この先生に師事したいと想い、このゼミに飛び込みました。

「僕の言うことをあんまり信用するなよ」「ちゃんとするな、ふらふらしとけ」と指導をされる先生ですが、本当は、学生や学問へのほとぼしる熱い情熱を持っておられる恥ずかしがり屋さんだということ、ゼミ員一同分かっています（笑）。「僕は脱力系だから」という先生にならない、ゼミ生みんなが、世の中をちょっとばかり斜めから眺める生き方を日々楽しく学んでいます！



けんじょう よしかず
権丈善一
商学部 教授

よくよく考えないと危ない——
それが、四半世紀ほど、経済学をツールとして社会保障を分析し、論じてきた実感である。

これまで私は、研究者そのものが、問題の解決者というよりは問題の原因である事例を数多く目の当たりにしてきた。むしろ、あなたがいなかった方が世のため人のためであつたはずと言いたくなる研究者、特に経済学者や政治学者がいかに多いことか。政策論という国民の生活に密着する研究領域の場合、間違えたら、たちどころに人々を不幸にしてしまう。後になって、間違えましたで済む話ではない。

かつて、福澤諭吉が、是非判断の分別がつかない者が政治経済を学ぶことを、「その危険は小児をして利刀を弄せしむるに異ならざるべし」と論じていた意味が、年を経るほどに分かるようになってきているのかもしれない。

これまでは、考えに考えて私が

論じてきたことは、その後起こった出来事と照らし合わせてみれば、なんとか大きな間違いはしていなかったような気もする。しかしそれも、学問半分、運とも言える直観半分くらいのみわどい思索の結果であるような気がしないでもない。

そうした私が、義塾で半学半教の身でいることができる年数は、まだ17年近くもある。これから研究生生活を終えるまで、大きな間違いをしない済むことがはたしてできるのか。晩年になって、結局私は研究者として世の中に存在しなかった方が人々は幸せだったのではないかと、反省しなくても本当に済むのか。

自分の論は自分で責任をとるしかないし腹を決め、既存の学問すらあてにせずひたすら自分で考える、というのが私の昔からのやり方である。「僕の仕事は考えることだよ」と学生に話す私は、彼らに「自分で考えろ」「考えろ、とにかく考えろ」と言うのが、いつもの口癖らしい——他にもいろいろあるらしいが（笑）。

受け継ぎたい福澤先生のDNA

当研究室は機械工学科に所属し、電場や磁場に応答する特殊な液体「磁気機能性流体」に関するさまざまな研究を行っています。
 〈4年生：5名、大学院生：8名(内留学生2名)〉

さわだ たつお
澤田達男
 理工学部機械工学科 教授

理工学部は文系学部と異なり、
 塾生は4年生になると卒業研究のために研究室に配属され、1年間(大学院進学ならばさらに2年間) 教員・先輩・同期との共同生活を行います。私の研究室では、毎週塾生に研究報告をさせ、彼らと共にその結果検討を行います。よい成果が出れば、学会発表をしても構いません。大学院生は、ほぼ全員国際会議で発表を行っています。コンパ(飲み会)もよく行います。合宿では卒論・修論の中間発表を行うとともに、みんなで大いに遊びます。冬には研究室でスキーに出かけます。このように、塾生は私や同期・先輩と密度の濃い関係を長期間持ち続け、互いを理解し、一生の絆が構築されます。

「官と私の学校の違いは、卒業生が母校を自分の学校と思えるかどうかである。慶應義塾はその思いが世界一の学校である」。これは、私が大学院生時代に、ある式典で故石川忠雄元塾長から伺ったもの

です。文言は正確ではないですが、このようなお話をされたら記憶しています。後輩塾生を指導し、多くの塾員を社会に送り出す立場になり、教え子たちと接する度にこの言葉を思い出します。

私は、1978年卒業の119三田会所属です。同期の間では、「我々は福澤先生のDNAを受け継いでいるのではないだろうか。もしそうであるなら、それを後輩に引き継ぐ責務があるのではないか」という話を時々します。塾生は、慶應義塾在学中、至る所に散りばめられた福澤先生のDNAを知らず知らずのうちに吸収していきます。理工学部においては、研究室での1〜3年間の生活でそれらがさらに熟成されると私は思っています。彼らが、将来大いに活躍する「気品の泉源、智徳の模範たる」紳士淑女に成長してくれることを、私は心より祈念しています。

*ここでは、DNAを象徴的な意味合いで使っています。

澤田研での有意義な留学生活

ジャン クリングレル 理工学研究科 総合デザイン工学専攻 修士課程2年(執筆時)
Jean Klingler ※2011年9月に修士課程を修了し、フランスに帰国。

澤田研究室では、磁石を用い、制御可能な磁性流体という特殊な液体について研究しています。「Smart Fluid」の一種であるこの液体は、近年開発されているハイテク緩衝器などに使われています。当研究室は実験的手法によって研究を行っていますが、装置の製作などに関して学生同士が日々協力合っています。研究室に所属した直後は研究についてはまったくの素人でしたが、先輩方から教えていただいて主体的に研究を進められるようになりました。フランス人としてこのような先輩後輩の関係は初めてでしたが、とても良い経験になりました。澤田先生のご指導のもと、研究活動とともにメリハリのある充実した2年間の学生生活を送ることができました。



言語と学習の認知科学

学習の仕組みを認知科学と脳科学の視点から解き明かし、よりよい教育を考える。

心と脳の働きから人間を科学する

すず きりゅういち

鈴木隆一 総合政策学部4年

私は総合政策学部所属ですが湘南藤沢キャンパスでは学部を超えた柔軟な履修が可能であり、本研究会に所属しています。

本研究会では言語班と教育班に分かれ、ことばや概念の習得や、学習や成長における脳の働きの変化の研究などを脳波測定実験やフィールドワークにて取り組んでいます。認知科学は人間の成長過程や人間の思考の根源を探る上で非常に興味深く重要な学問です。専門的でありながらも、心理、言語、教育など多岐にわたるテーマを包括的に捉え、文系理系の枠を超え多面的な視点からサイエンスに携わることの面白さがあります。ゼミ生の発表に対する先生のコメントにより、毎週サイエンスの深さに気づかされます。



いまい
今井むつみ
環境情報学部 教授

今井研究室の大きなテーマは乳幼児の言語の獲得過程とその背後の仕組みを解き明かすことです。人はことばについてどのような知識を持ち、それを脳内情報として記憶しているのでしょうか？そして耳に入ってくる言語を理解したり、言いたいことを話すとき、脳はどのように働いているのでしょうか？そして、乳幼児はどのように言語を学習しているのでしょうか？今井研究室では、これらの問題に認知心理学と脳科学の実験的手法を用いて取り組んでいます。特に大切に思っているのは、認知発達と言語獲得の関係です。子供は言語を学習することで、概念などの認知機能を発達させていきますが、一方で、認知の基盤を持つているからこそ言語の学習が可能になるという面もあります。このように言語と認知は、支え合いながらお互いを引っ張り上げていく双方向的な関係にあり、これを「ブートストラッピング

(bootstrapping)」と呼んでいます。ちょうど編み上げ靴の金具に次々と紐がかかっていくようにして、子供は語彙を発達させ、概念を構築していきます。そのメカニズムを、明らかにしたいと考えています。また、この過程がどのくらい日本語、英語などの個別の言語に固有で、どのくらい言語の間で普遍的なのかという観点をとても大事に思っており、現在アメリカ、イギリス、香港、スイス、オランダなどの大学、研究機関と共同研究を行っています。今井研究室のもう一つの大きな研究テーマは「学習と教育」です。言語獲得はある意味で人間のあらゆることの学習過程の縮図といえます。言語獲得の基礎研究で得られた知識から人の学習全般の認知過程を考え、どのように教育に適用、応用できるかに取り組んでいます。その一つの試みとして、小学校の現場の先生とのワークショップを定期的に行っています。